

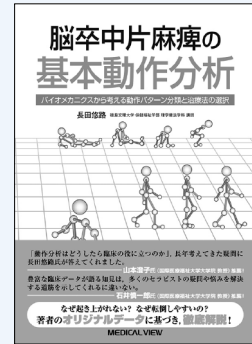
脳卒中片麻痺の基本動作分析 バイオメカニクスから考える 動作パターン分類と治療法の選択

長田悠路(著)

B5判・232頁

定価：5,940円(本体5,400円+税10%)

メジカルビュー社刊、2021年



「臨床に役立つ動作分析」のはじめの一步

[評者] 山本澄子 国際医療福祉大学大学院福祉支援工学分野

「動作分析はどうしたら臨床の役に立つのか」、これは長年、動作分析にかかわってきた筆者がずっと考えてきた疑問です。本書の著者である長田悠路氏がこの疑問に答えてくれました。長田氏は福岡県の誠愛リハビリテーション病院で9年間、その後、静岡県の中伊豆リハビリテーションセンターで3年間、理学療法士として勤務されました。どちらの施設にも三次元動作解析装置があり、長田氏は多くの患者さんの計測を行ってきた経験を活かしてこれまでに動作分析に関連した6本の原著論文を書かれています。さらに2019年6月に神戸で開催された国際リハビリテーション医学会(ISPRM2019)では多くの発表の中から最優秀ポスター賞を受賞されました。このように長田氏は恵まれた環境で研究者としての実績を重ねてこられました。研究テーマはすべて臨床家としての視点に立ったものでした。本書は研究者と臨床家の両方の視点をもつ長田氏でなければ書けなかったもので、大きな2つの特徴があると思います。

1つ目の特徴は動作分析による客観的な知識やデータから臨床

に役立つ情報を取り出していることです。動作分析に限らず、一般的に研究者が求めているのは普遍的な結果であり、多くの患者さんに共通した情報です。これに対して臨床家が求めるのはそれぞれの患者さんに対する個別の情報です。本書が対象とする脳卒中片麻痺者の動作について、長田氏は本書の中で「安定性」、「効率性」、「(姿勢の)対称性」の3つの段階があると述べられています。これらの中で臨床家は「安定性」を重視する一方で、多くの研究で扱われるのは「効率性」と「対称性」です。研究者が「効率性」と「対称性」に着目する1つの理由は「安定性」に問題がある患者さんはばらつきが大きすぎて研究の対象になりにくいことがあります。本書の中で長田氏は臨床家の立場から「安定性」に関する記述に多くのページを割いて、通常の研究では扱わないようなデータを使ってできる限り客観的な説明を試みています。特に「第6章 歩行」では、1,056人を対象とした28,519試行の歩行データの中から計測中に転倒しそうな32人(36試行)を取り出して詳細に分析しています。このような

データは世界的に見ても類を見ない非常に貴重なものであり、動作分析から臨床に役立つ情報をみごとに取り出したものと考えます。

もう1つの特徴は動作分析から明らかになった問題点に対して治療法の案が提示されていることです。長田氏が書かれているようにこれらの治療法は経験に基づくもので十分なエビデンスがあるものではありません。ただ、今後、治療法についてエビデンスを積み重ねていくためには、このような提案が不可欠と考えます。本書で示されたフローチャートなどが読者のご意見を含めてよりよいものを作っていくきっかけになればと思います。

このように本書には多くの有益な情報が掲載されています。特に多数掲載されているグラフについては、動作分析のデータを扱ったことがない方にとっては難しい内容かもしれません。その場合は、グラフについては読み飛ばしていただいても長田氏の言いたいことが伝わる内容になっていると思います。本書が、「臨床に役立つ動作分析」のはじめの一步として活用されることを願っています。